

腎悪性絨毛上皮腫の1例

十三市民病院泌尿器科（科長：辻田正昭）

船 井 勝 七

辻 田 正 昭

十三市民病院産婦人科

亀 井 輝 二

豊中市民病院泌尿器科

中 西 純 造

MALIGNANT CHORIOEPITHELIOMA IN THE KIDNEY:
REPORT OF A CASE

Katsuhichi FUNAI and Masaaki TSUJITA

*From the Department of Urology, Juso Municipal Hospital**(Chief: M. Tsujita, M.D.)*

Teruji KAMEI

From the Department of Gynecology, Juso Municipal Hospital

Junzo NAKANISHI

From the Department of Urology, Toyonaka Municipal Hospital

A 31-year-old woman was admitted to our hospital with gross hematuria and a child-head-sized mass under the right hypochondrium. She received curettage for hydatidiform mole 2 years ago.

DIP revealed deformity of the renal pelvis on the right side. Selective renal angiography showed hypovascular lesion at the lower pole of the right kidney. HCG were determined to be of high level.

The patient died 24 days after nephrectomy in spite of adequate chemotherapy.

Metastatic chorioepithelioma in the kidney was confirmed by histological examination.

緒 言

悪性絨毛上皮腫は、子宮に原発する腫瘍のうち最も予後の悪い腫瘍として知られているが、腎に同腫瘍がみられるのは非常にまれである。

最近われわれは、胎状奇胎の既往のある患者の腎に悪性絨毛上皮腫が認められた症例を経験したので報告する。

症 例

患者。○橋○子，31歳，女性

初診。1978年11月9日

入院。1978年11月9日

既往歴。過去に正常分娩2回，1976年10月胎状奇胎にて子宮内容除去術を受け，以後定期的に婦人科的 follow up を受けていたが子宮には特に異常を認めなかった。

現病歴。1978年8月末ごろより，心窩部の圧迫感があり，近医で薬物治療を受けていたが，同医で腹部腫瘤を指摘され豊中市民病院内科を受診。同科で DIP，AAG などのレ線検査の結果右腎腫瘍と診断されて，MMC の動脈内注入および progesterone の内服などの化学療法ののち，手術目的で当科に入院した。

入院時現症。体格栄養中等度。眼瞼結膜には貧血を認めないが，右季肋部下に小児頭大の表面平滑な硬い腫瘤を触知した。

入院時検査成績. 血液所見: RBC $318 \times 10^4/\text{mm}^3$, WBC $8500/\text{mm}^3$, Hb 9.5 g/dl, Ht 31%, platelet

$17.1 \times 10^4/\text{mm}^3$, 血沈 42/89. 血液生化学所見: BUN 21 mg/dl, s-creatinine 0.5 mg/dl, PSP 51% (15'), GOT 44U, GPT 27 U, ALP 14.9 U, LDH 1227 U, γ -GTP 85 mu/ml, HCG 80 IU/L, 総蛋白 5.3 g/dl, A/G 1.52

X線所見 DIP: 左右腎の排泄機能は良好で左腎の

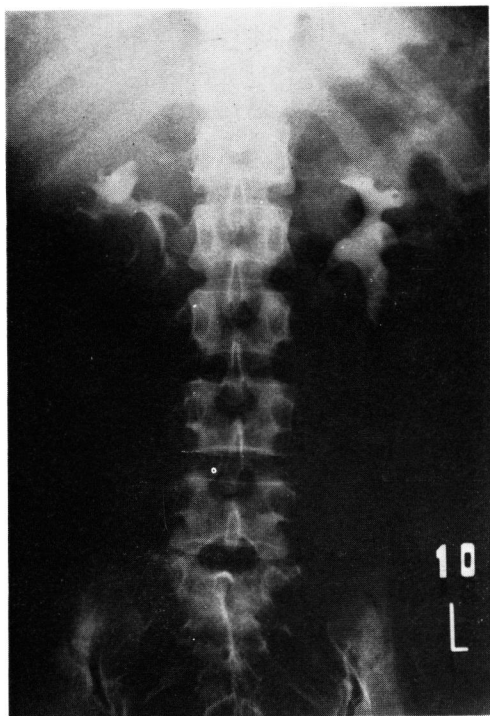


Fig. 1.

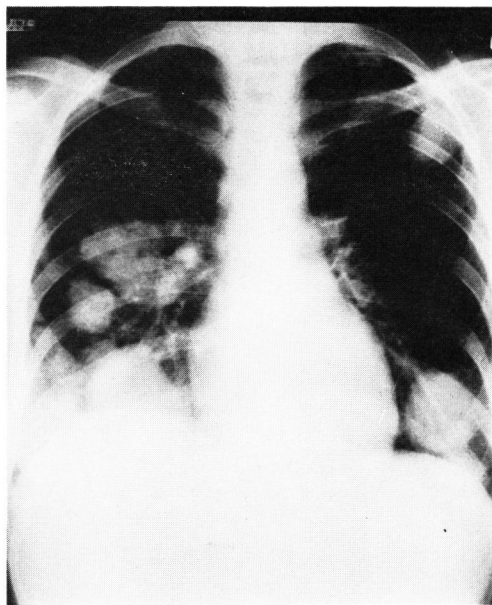


Fig. 3.



Fig. 2.

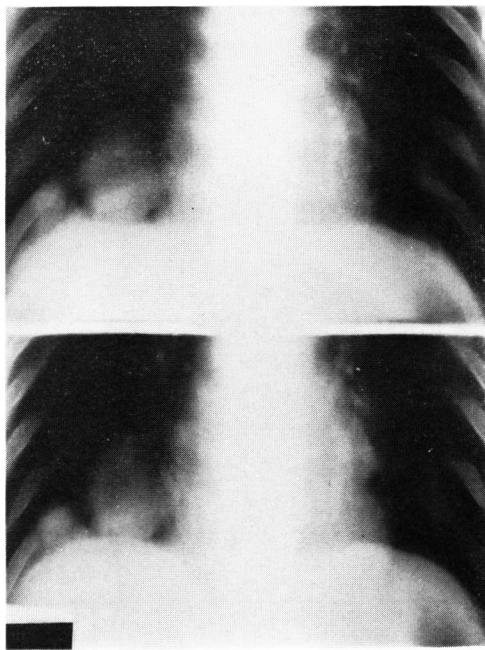


Fig. 4.



Fig. 5.

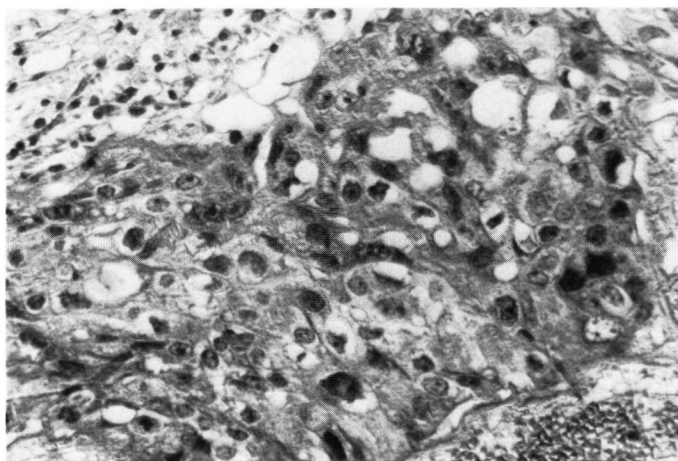


Fig. 6.

腎杯には異常はないが、右腎の下腎杯は著明に圧排されていた (Fig. 1)。

selective angiography: 上極に hypervascularity と下極に abnormal tapering および広範囲の central hypovascularity がみられた (Fig. 2)。

胸部レ線：両肺野に円形の異常陰影がみられた (Fig. 3)。その断層撮影では、それが境界比較的明瞭な、明るい円形像として認められた (Fig. 4)。

臨床経過。以上の成績より右腎腫瘍と肺転移と診断したが、胸部レ線とゴナビス妊娠反応の再検で、異常陰影の急速な増悪と HCG の 64,000 単位と異常高値を認めたことから、絨毛性腫瘍の疑いをもって11月22日手術を施行した。

手術時、右腎表面は特記することがなく、周囲との癒着も中等度で比較的容易に右腎を摘出できた。

腎摘後4日目より actinomycin D 0.5 mg, MMC 2 mg, cytarabine 40 mg を隔日に静注した。しかしながら2週目ごろより鼻出血ならびに消化管出血などの出血傾向とともに、白血球数が $2800/\text{mm}^3$ に、血小板数が $54000/\text{mm}^3$ に減少したため直ちに化学療法を中止したが、中止後もさらに白血球数は $200/\text{mm}^3$ 、血小板数は $2000/\text{mm}^3$ と著明に減少した。それゆえ新鮮血輸血および濃厚白血球、濃厚血小板などの成分輸血と静注用 γ -グロブリンの大量療法を行なったが術後24日目に死亡した。

病理学的所見。摘出腎は大きさ $14 \times 12 \times 10 \text{ cm}$ 、重量 800 g で、その断面は、一部の正常腎組織を除いてほとんど全域が出血巣と壊死巣で充満され、触知すればスポンジのような感触であった (Fig. 5)。組織学的には、出血、壊死巣の中に syncytium 細胞と思わ

れる単核の巨細胞が多数みられることから malignant chorioepithelioma と診断された (Fig. 6).

考 察

悪性絨毛上皮腫は絨毛膜の絨毛上皮細胞に由来する悪性腫瘍で、同腫瘍は Langhans 氏細胞と syncytium 細胞が腫瘍の母細胞であり、その増殖性はきわめて強く、早期に血行性転移を起こしやすいことが知られている。そしてその転移部位は、剖検によると肺が最も多く、ついで脳、肝となっているが、腎への転移もそれらについて多くみられる¹⁾。

しかしながら、おもに泌尿器科的症状を主訴として発症した臨床報告はまれで、本邦では Table 1 に示すごとくわずか26例にすぎない²⁻¹⁵⁾。

報告例の検討 年齢は最少 25 歳から最長 57 歳までで、そのうち 30 歳代が 12 例 (44%) と最も多い。患側は自験例も含めて右側 18 例、左側 5 例と圧倒的に右側に多いがそのわけは推論できない。症状は血尿が 22 例 (85%) と最も多く、腹痛、腎腫瘍もかなりみられる。既往歴との関係は、自験例も含めて 27 例中 17 例 (63%) が胎状奇胎を経験しており本腫瘍と胎状奇胎は密接な関係があると考えられる。両者の関係については、特に胎状奇胎の既往から腎腫瘍発現までの期間を仮に潜伏期間としてみると、最短例は 2 カ月で、ほとんどが 3～4 年までであるが最長例は 12 年にも及

ぶ。このことは、本腫瘍と胎状奇胎の関連性を推察するうえで非常に興味深いことである。

腎に悪性絨毛上皮腫が発生する機序は、いわゆる奇形腫として腎に発生する場合が考えられるがこれは、世界でも 1 例の報告しかみられないほどまれである。つぎに妊娠中に子宮の絨毛上皮細胞が血管内に遊離し、腎に付着して悪性化することも考えられるが、やはり胎状奇胎後に子宮に生じ二次的に腎に転移する機序が最も多いようである。ただこの場合胎状奇胎のときに、すでに悪性化する要素をもった上皮細胞が腎に運ばれていて、一定の潜伏期間を経て腫瘍が発現したとも考えられる。いずれにしても、腎に発生する悪性絨毛上皮腫は、過去に胎状奇胎を経験していればそれと密接に関連すると言っても過言ではないだろう。自験例の場合は、胎状奇胎で内容除去術をうけたあと 2 年間子宮に腫瘍はみられず妊娠反応も陰性であった。このことは、胎状奇胎と腎悪性絨毛上皮腫の直接の結びつきを考えがたいが、秦・相馬¹⁰⁾は、胎状奇胎の人工掻破術が他への転移を促進すると報告しており、実際人工掻破あるいは自然流産にて子宮内の胎状奇胎が除去されたあとでも他臓器での発生がみられることから、自験例は、胎状奇胎から生じた悪性絨毛上皮腫が腎へ転移し、何らかの機転で 2 年後に発現したものと考えられる。

予後 近年子宮の絨毛上皮腫に methotrexate や

Table 1. 腎悪性絨毛上皮腫の本邦報告例

報告者	報告年	年	患側	主 訴			最終妊娠	潜伏期間	予 後
				血尿	腹痛	腎腫			
1. 武 藤	1927	39	右	+	+	+	胎状奇胎	12 年	死亡、術後 9 週
2. 武 藤	1927	45	右	+	+	+	正常分娩		死亡、術後 2 時間
3. 荒 田	1928	32	左	+	+	+	正常分娩		死亡、術後 2 ヶ月
4. 佐 伯	1932	52	左	+	+	+	正常分娩		死亡、術後 2 ヶ月
5. 千 賀	1932	45	両側				胎状奇胎		死亡、
6. 手 島	1936	39	右	+	+	+	胎状奇胎	4 年	死亡、術後 8 ヶ月
7. 和 賀	1936	49	両側	—	+	+	胎状奇胎	3 年	死亡、
8. 溝 口	1941	33	右	+	+	+	正常分娩		
9. 市 川	1950	37	右	+			正常分娩		死亡、術後 1 ヶ月
10. 阿 部	1952	35	右	—	+	—	胎状奇胎		
11. 川 村	1953	40	右	—	+	—	自然流産		
12. 石 神	1954	41	右	+	+	+	胎状奇胎	7 年	死亡、術後 2 ヶ月
13. 谷 野	1954	47	右	+	+	+	胎状奇胎	3 ヶ月	死亡、術後 1 ヶ月
14. 大 矢	1954	57		+	—	+	胎状奇胎		
15. 神 村	1955	39	右	+			胎状奇胎	1 年	死亡、
16. 山 田	1955	57	右	+	—	+	胎状奇胎	6 年	死亡、術後 5 ヶ月
17. 齊 藤	1955	27	右	+	+	+	胎状奇胎	1 年	死亡、術後 3 ヶ月
18. 林	1955	36	右	+	+	+	胎状奇胎	4 年	死亡、術後 2 ヶ月
19. 片 山	1956	27	左	+	—	—	胎状奇胎	2 ヶ月	死亡、術後 3 ヶ月
20. 田 尻	1957	27	左	+	—	—	正常分娩		死亡、
21. 篠 田	1958	31	左	—	+	—	正常分娩		
22. 村 田	1961	25	右	+	—	—	正常分娩		死亡、術後 2 ヶ月
23. 高 井	1961	28	両側	+	—	—	人工流産		
24. 大 堀	1965	30	右	+	+	—	胎状奇胎	4 年	死亡、術後 4 ヶ月
25. 中 川	1969	32	右	+	+	+	胎状奇胎	1 年	
26. 小 路	1978	47	右	+	+	+	胎状奇胎	3 年	
27. 自験例	1979	31	右	+	+	+	胎状奇胎	2 年	死亡、術後 24 日

actinomycin D などの化学療法剤が有効とされている。川島¹⁷⁾は同化学療法剤で5年生存率が50%以上になってきたと報告している。また Hertz ら¹⁸⁾は、将来挙児を期待しうるものとして、手術をせずに化学療法剤のみで治療しようとする primary chemotherapy を提唱しているが、他臓器への転移がある場合はその予後は非常に悪い。腎悪性絨毛上皮腫の場合も、Table 1 のごとく、術後最短2時間から最長8カ月までほとんどが死亡しており、腎に同腫瘍が発現するような例では、同腫瘍の性質上、他臓器への転移も充分考えられて、その予後はきわめて悪いと言える。自験例は剖検をなしえなかったため、術前あった肺の腫瘍陰影が絨毛上皮腫の転移かどうか確認できなかった。しかしながら川島¹⁷⁾は、肺における絨毛上皮腫の陰影は、比較的濃い円形像が特長としている。また腎の血管造影で、Kutcher¹⁹⁾は絨毛上皮腫の特長として、出血、壊死巣で充満されることから hypovascularity をあげている。自験例の場合は、これら特有の像が、胸部レ線でも、腎動脈造影でもそれぞれみられた。

これらのことと、その臨床経過がきわめて速かったということなどを考えあわせれば、本例は胎状奇胎で発生した悪性絨毛上皮腫が腎と肺へ転移したものと考えられる。そしてその転移は腎が先か肺が先か推論はできないが、いずれにしてもその増殖性がきわめて強いことから、手術と化学療法を施行したにもかかわらず不幸な転帰をもたらしたと言える。

最後に HCG との関係を見ると、絨毛性腫瘍は HCG を大量に分泌産生し、その増減は同腫瘍の消長と比較的よく対応するとされている。自験例もゴナビス妊娠反応により HCG の増減をみたが、actinomycin D および MMC の投与によって、当初 64,000 単位あった HCG が 4,000 単位にまで低下し、中止すると再び 128,000 単位にまで上昇した。このように自験例の場合も、化学療法剤による腫瘍の一時的な退縮が HCG に如実に反映されたと言える。したがって今後の展望として本腫瘍には、HCG のより綿密な追求が必要であり、それに対応した適切な化学療法がさらに要求されるものと考ええる。

結 語

2年前に胎状奇胎を経験した31歳の経産婦の片腎に悪性絨毛上皮腫が認められた1例を報告し、本邦における腎の悪性絨毛上皮腫の臨床報告例について若干の

考察をした。

本論文の要旨は第87回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

文 献

- 1) 相馬広明：絨毛性腫瘍の転移の臨床。東医大誌, 26: 801~815, 1968.
- 2) 荒田一郎：腎臓悪性脈絡膜上皮腫に就て。日泌尿会誌, 17: 13~24, 1928.
- 3) 手島 遼：腎臓悪性脈絡膜上皮腫に就て。東北医誌, 19: 833~838, 1936.
- 4) 溝口周策：腎臓原発性悪性絨毛上皮腫知見。日泌尿会誌, 30: 590~599, 1941.
- 5) 市川篤二・ほか：日泌尿会誌, 41: 40, 1960.
- 6) 石神襄次・片岡洋一：腎臓悪性絨毛上皮腫知見補遺。皮膚紀要, 50: 202~205, 1964.
- 7) 谷野 博：日泌尿会誌, 45: 544, 1964.
- 8) 神村瑞夫：日泌尿会誌, 46: 121, 1965.
- 9) 山田瑞穂：腎臓の悪性上皮腫について。医療, 9: 792~797, 1955.
- 10) 齊藤 豊・伊藤一元：日泌尿会誌, 46: 226, 1955.
- 11) 片山虎太・ほか：共済医報, 5: 457, 1956.
- 12) 村田奎二・ほか：正常分娩後短期間に絨毛上皮腫を発生し腎臓に転移を来した1例。日赤医学, 14: 152~156, 1961.
- 13) 大堀 勉・ほか：腎悪性絨毛上皮腫の1例。臨泌, 21: 863~866, 1967.
- 14) 中川 隆・ほか：日泌尿会誌, 50: 354, 1969.
- 15) 小路 良・ほか：腎転移性絨毛上皮腫の1例。臨泌, 33: 83~86, 1979.
- 16) 秦清三郎・相馬広明：戦後10年間の悪性絨毛上皮腫の観察。産婦の世界, 8: 214~222, 1956.
- 17) 川島吉良：絨毛性腫瘍の治療。臨婦産, 26: 219~228, 1972.
- 18) Hertz, R. et al.: Primary chemotherapy of nonmetastatic trophoblastic disease in women. Am. J. Obstet. Gynec., 86: 808~814, 1963.
- 19) Kutcher, R. et al.: Renal choriocarcinoma metastasis: a vascular lesion. Am. J. Roentgenol., 128: 1046~1048, 1977.

(1979年9月25日受付)